

第 11 回西アジア分科会 議事録

開催日時：2009 年 10 月 16 日（金） 15:00～17:00

場 所：東京文化財研究所 第一会議室

出席者（敬称略）：前田耕作、上岡弘二、西秋良宏、高橋和夫（以上、西アジア分科会委員）、赤澤威、古市徹雄（以上、特別参加）八木和広（文化庁）、守山弘子（外務省）、高橋正和（国際交流基金）、関広尚世（西アジア考古学会会員）、清水真一、山内和也、宇野朋子、有村誠、鈴木環（以上、東京文化財研究所）、田代亜紀子、原本知実、原田怜、土居加奈子、小角由子（以上、文化遺産国際協力コンソーシアム）

1. バーミヤーン遺跡の現状

山内和也（文化遺産国際協力センター）

バーミヤーン遺跡保存事業第 9 次ミッションの成果報告。2009 年 6 月 26 日から 7 月 9 日までの間で、バーミヤーンに滞在したのは 28 日から 7 日までの非常に短い時間であった。ほぼ 2 年ぶりの訪問であったので、数多くのことを片付ける必要があった。日本側からは清水、山内、前田先生、有村の 4 名が参加し、アフガニスタンの国立博物館からは 2 名が参加して共同で行った。今回のミッションの主な目的は（1）壁画の現状調査（2）文化財の新しい収蔵庫への移送（3）放射性炭素 14 年代測定用の試料の採取であった。特に（1）（2）が重要であった。（1）に関しては第 8 次調査までの間に実施してきた壁画保存と修復方法を実施してきたが、現在の状況を確認するのが大きなテーマであった。（2）文化財の移送に関しては、壁画の保存修復の段階で回収した壁画の断片、また発掘・試掘調査で見つかった様々な遺物を、これまでは倉庫としていたバーミヤーン教育文化センターの管理棟の一室に保管していたが、火事になるとすべて焼失してしまう恐れがあるため、日本ユネスコ協会連盟の支援で建設した新たな収蔵庫にそれらを移送した。（3）に関しては、これまで、石窟の編年や壁画の編年に放射性炭素年代測定法を測定してきたが試料数が足りないため抜け落ちている部分を補うために、試料を採取した。これら 3 つはいずれも今回成し遂げることができた。

壁画の保存状態に関して言うと、Ha 窟では壁画剥れ落ちてしまっている状況が観察された。これは人為的なものではなく接着度が弱くなって落ちており、そういう例が少ないながらも観察されている。したがってできるだけ早く広範囲な保存処置、特に剥落専門家と協力して、止めをしていくことが必要であるが、しかしながらこれは日本人がす

べて行うという意味ではなく、日本人は治安状況などで頻繁に行くことは困難であるため、アフガン人専門家が彼ら自身でやっていくという体制をいち早く作っていくことがバーミヤーンの壁画を守っていく上で不可欠である。

バーミヤーンでは地雷除去が進められており、重機を用いた地雷除去が問題になっている。また地雷除去が終わった場所では、盗掘をしたり、洞窟の恐れもあり、また、石窟に人が住み始めたりするなどの問題も生じている。人々の生活を守りながらどのようにして文化遺産を守るか、また文化遺産をどのように活用するかが、今後バーミヤーン遺跡で将来的な問題である。

- ・今後どのような見通しでバーミヤーン遺跡保存活動を行っていくのか
- 一現時点では、治安状況が許せば来年の連休明けにはミッションを派遣したいと考えている。アフガン人の専門家の現地での研修も行い、日本人がいない間にでも継続して活動できるようにして、また可能であれば秋にその成果を確認しに行くことを検討していきたい。
(山内)

2、シリア デデリエ洞窟の保存に関する調査報告

宇野朋子（文化遺産国際協力センター）

2009年1月に赤澤先生からシリアのデデリエ遺跡について報告をしていただいた際に保存管理や公開についての相談を受けた。サイバー大学の青木繁夫先生と現地を訪問し、遺跡を視察した。デデリエ遺跡はアレppoの北西約60kmのところにある。赤澤先生の発掘されている洞窟では1990年代初めから発掘が始められ、ネアンデルタール人骨の発見、洞窟入り口の旧石器時代の住居跡の発見（2005年）など、世界的にも注目されている場所である。今後、遺跡の公開して行きたい意向があり、保存・公開の方法について相談を受けた。

一般的に洞窟内は閉鎖的な感じがあるが、現場の洞窟は奥にチムニー（開口）があるため、一年を通して風通しが良く、特に夏は低湿度だった。洞窟の上の方から水が浸透して、天井から滴るような場所もみられた。保存状況は、住居跡の石部分に関しては、現状では砂が固まって石を固定しているが、発掘によって表面が露出した部分の土が砂化している。このままの状態では、さらに石の周りの土が砂化し、崩れていくことが考えられる。住居に使用された石材は比較的健全な状態であった。住居跡の土壌部分に仮にガラスで覆いのようなものでふさぐと、通気がなくなり、湿気がこもった状態となり、放置すればカビのようなものが生えることが予想される。

ネアンデルタール人遺構も、発掘直後は湿った状態だったが、現在は表面が砂化していて、ボロボロの状態であった。

洞窟全体の問題としては、水の侵入、日射の遺構への照射による表面の砂漠化がある。これら水と光の問題により、放置すれば、表面からどんどん崩壊が進行すると考えられる。

したがってまずは、全体の現状の記録、住居跡のレプリカによる復元の可能性の検討、保存管理計画の作成が必要となる。見学路や展示の方法、展示施設などをまとめて年代的な保存管理計画を立て、その上で個別の遺構についての公開の方法を検討する必要がある。見学者の安全性も考慮しなければならない。

遺構面の保存処理については、合成樹脂を塗布し、表面から水分の蒸発を抑えて、乾燥、砂漠面を防ぐ方法が考えられる。天井からの水滴については、水の滴る場所を特定・記録してその場所を塞ぐ、もしくは、水滴を受けるような対策が必要である。保存修復処理後の維持管理体制作りが重要となる。

今回の調査では、これからの保存対策について検討するための資料として、土壌水分量・温度、洞窟内の気温・湿度を測定するための機器を設置した。設置場所は、住居跡とネアンデルタール遺構付近である。保存管理計画を作成する際には、これらのデータが基礎的な資料となる。

今後、どのような保存管理計画を立てるとしても、より多くの人にきてもらえるように、さらに日本人がきちんと調査してきたということをアピールできる場所として遺跡を公開できる方法を検討する必要がある。

ー日本は非常に多くの海外調査を行っている。遺跡は調査が終わると報告書が出版され、報告書・専門的な報告書の世界では生きていけるが、それ以外の成果というのは結局忘れられる。これを改善する必要があるので、調査後の遺跡の保存をやらなければならない。

ー文化庁としてできるのは、国内の研究機関にご協力いただいて、海外に行ってもらってその国の人材育成をするということが中心である。今後、予算の面で厳しいところも出るかもしれないが、その場合はコンソで知恵を絞って活動してほしい。

ーこの洞窟発掘の本格的な調査は一応今年度で一区切りついた。次からのプロジェクトというのは、遺跡を恒久的に保存し且つ、これにフォーカスを当てた博物館構想を実現する方向にもっていきたいと思っており、それをにらんでの外部資金の検討が今後必要となる。

3. スーダン共和国におけるヌビア遺跡群の現状と課題

関広尚世（西アジア考古学会会員）

2007年にスーダンを訪問し、現地文化財研究者や関係者と交流を深める中で、遺跡の調査、文化財の調査、文化財の保存などで問題を抱えていることを知った。そこで2009年にまずヌビア遺跡の保存状態や活用の現状を調査するために現地を訪れた。2009年の滞在時にはダム建設によって水没の危機にある多くの遺跡があることを知り、スーダンの文化財が取り巻く現状があまりにも厳しく、個人では対処のしようがないのが現状であると認識した。本報告ではそれらの遺跡を3種に大別し、その現状と課題について述べる。

スーダンの文化財は、①世界遺産条約制定の端緒となった遺跡、②世界遺産登録遺跡、③世界遺産未登録遺跡の3つに分類できる。①の端緒となったのがヌビア遺跡群であり、同遺跡群は、エジプト・アラブ共和国のアスワンからスーダンのナイル川第2急端までに分布する。アスワンハイダム建設に伴い、スーダン側のヌビア遺跡は首都ハルツームにある国立博物館（ハルツーム博物館）に移築復元された。保存状態は比較的よい。②の世界遺産登録遺跡は、ゲベルバルカル、エル＝クッル、ヌリ、サナム、ズーマの5遺跡が「ゲベルバルカルとナパタ地域の遺跡群」として2003年に登録されている。ゲベルバルカルとナパタ地域の遺跡群は、世界遺産登録遺跡にも関わらずその現状は決して良好とはいえない。建造物が砂岩でつくられているため、ヒエログリフが刻まれた彩色壁画はもとより、建物そのものが風化を受けているのが現状である。また、エルクッルのピラミッドは上部の石材が完全に取り去られており、墓室内が完全に野ざらしになっている。他にも円分の上部構造が流出して、遺跡配置図がなければ確認することが難しいといえる。

壁画の彩色について言うと、スーダンでは壁画修復に携わることができる専門家が2名しかおらず、スーダン全体の彩色壁画に対応することは不可能であるとの話があった。スーダンではNCAMという文化財保護を行う考古局のような組織があるが、この修復部門には織物、金属、土器、化学の専門家がいて、慢性的な人材不足の状況にある。他にも水害や害虫の被害もある。

③世界遺産未登録の遺跡とは、主にスーダンの文化財保護法の下にあり、これまで発掘調査が行われたまたはこれから発掘調査が必要な遺跡が該当する。メロエ遺跡のように例外的に遺跡の一部が外国隊の援助により復元されている遺跡もあるが、多くの遺跡が整備はもとより発掘調査も十分に行われていないのが現状である。また、劣悪な状態にある遺跡も多々あり、そういった状況に加えて高速道路や宅地開発により危機に瀕している遺跡も多くある。またその大多数の遺跡の中にはダムの底に沈もうとしている遺跡もある。中でもカジュバルダム水没遺跡群がある。カジュバルダムは第3急端から東へ20kmの地点にある。2009年4月現在スーダンには8基のダム建設計画がある。その

一基がカジュバルダムである。この地域では、690 件にのぼる先史時代からイスラム時代までの遺跡が発見されている。スーダンの文化財関係者や研究者は、この事態を非常に危惧しているが、他の開発に伴う調査もあり、NCAMの発掘担当者では対応しきれないため、国際的な支援を求めざるを得ない状況にある。

スーダンでは保存されるべき世界遺産登録遺跡と未登録遺跡の現状はあまりに厳しい状況にあるといえる。急速なインフラ整備による緊急調査の増加と、内戦と紛争による遺跡調査の停滞、そして考古学と保存科学といった専門家養成の遅れが、根本的な問題としてある。一方でスーダン研究者による日本人研究者に対する信頼は非常に厚くスーダンでも活動してほしいとの要望がある。また 4 月には日本大使に、長期的な研究者交流と、考古学的・保存科学的技術支援の要請もあった。このような背景から、日本が果たせる役割として、発掘調査隊の派遣、考古学博物館への支援、専門家の長期的交流が挙げられる。スーダンの文化財を取り巻く問題解決、カジュバルダム水没危機遺跡群に対する調査・記録に向けて皆様のお力をお借りしたい。

- ・日本政府は自衛隊の派遣を含めて様々な協力を行っているので、スーダンという国が置かれている現状を踏まえて、どのような支援を行うのが適切かを検討している。スーダンはホットな支援の対象となっているので、各国との兼ね合いもある。
- ・支援するとなれば税金を使うわけであり、根拠と説明可能な理由が必要となる。
- ・エジプトには多くの日本人が入り資金的にも技術的にも支援を行っているのに、同じ文化圏であった自分たちの国にはどうして来てくれないのかという声も聞く。これに対して、現在は政治的に危険な地域だと説明すると、第 3 急端はそれほど危険ではないという。双方には温度差と認識の差があるのが明白であるのではないか。
- ・彼らが力を入れるのは当然。確かに自衛隊を派遣するが、それを直接的に文化支援といった形に結び付けられても困る。息の長い文化支援にするためには、それをどのように位置付け、文化的価値についてどのように認識を共有できるかが重要だと思う。
- ・スーダン側は日本人が入って存分に調査を行ってもかまわないが、保存科学と発掘調査の技術支援、そして研究者と学生の交流といったことを具体的に続けてほしいとのことだった。
- ・スーダン側から要望を挙げてもらうのがよい。

・要望とはどのレベルまで上げるのがよいのか。スーダンから日本に支援を要請しても断れたとの相談を受けている。スーダン側からのアピールの仕方など教えていただきたい
ーノウハウよりもスーダンがどのような要請を求めるのかが分かっていない点が問題。具体的なものがある方が知恵を出しやすい。日本にどういう支援を望んでいるのか、またその支援を仲介する役割を果たす人が必要といえる。仲介者が中心となっているいろいろな先生方の協力を集めることが必要。

4.その他

・ラクイラ地震報告

①イタリア中部ラクイラにおいて発生した地震に対する対応について

八木和宏（文化庁）

4月6日にイタリア中部のラクイラでマグニチュード6.3の地震が発生して、多数の文化財も被害を受けた。文化庁もイタリアの文化財文化活動省と協力関係にあり、平成19年3月以降、交流を深めている。今年は6月頃から首脳会談に向けて、文化庁と外務省で調整を進め、7月のラクイラサミットの日伊首脳会談で3つの支援が盛り込まれて、その中に文化財の支援に関する派遣事業が含まれた。これに基づき8月10日から16日まで調査団を派遣した。今後は日本としてどのようなことができるのか、どういうところを対象とするか等について、イタリアを協議をしながら進めていく予定。

②ラクイラ地震に係る調査報告

清水真一（文化遺産国際協力センター）

ラクイラはローマの東北東約100kmにあり、海拔が700mから800mほどの周囲を小高い山に囲まれた盆地で、そのあたりで直下型の地震が発生した。

震災後の対応を紹介すると、4月初頭に地震が起きて、9月を目処として半年間にわたり建物レスキュー隊が活動した。まず保存地区全体を立ち入り禁止エリアにしており、活動できるのはそのレスキュー隊のみでその他は文化財関係者も入れない。つまりレスキュー隊でなければ、何があった時も保険は下りないということで、たとえば重要な彫刻や絵画等を運び出したいという場合も、入口まではそのレスキュー隊が持ち出している。我々が訪れた8月は、こうしたレスキュー活動は終了に向かっている。ラクイラでは大体300年に1回大地震が発生しており、各建物にもそれぞれその時々地震の被害や修理の跡、増築されたもの、あるいは建て替えられたものなどあるが、現在はおおむね1703年の地震後の姿を残している。

手元の地図には 45 件の建物が載っている。これはイタリアの首相が 45 件のリストを示して、世界に対して「養子を探している」という言い方で救援を求めたリストである。この「養子を探す」とは、あくまでイタリアが主体で修理活動を実施し、一緒に修理活動に参加する各国には責任を負わせない、また主導権はイタリアが持ち、修理の方針もイタリアが決めるということである。

現地では建造物を回って損傷状態や各国からの支援状況を調査した。ドイツはイタリアのレスキュー隊に相当する組織を派遣していたり、スペイン要塞に関してはスペインの協力があつたりなどが見られた。フランスの協力は修復費用も折半し、人員もイタリア側の専門家と同等の専門家を同数派遣し、彼らが一対一で修復に当たることができるように対応していた。

郊外にあるサン・ステファノ・セッサノーは教会が所在するこの街の中心にある建物であるが、全壊の状況にあつた。サン・タゴスティーノ教会は元教会で、現在は劇場として使われているものであるが、屋根全体が落ちてしまっているといった状況にあつた。その他にも合計で 14 か所を調査として訪れた。

ー日本隊は絶えず調査隊を出す、その調査からもう半歩足を出すということも難しい。それが中途半端に終わるケースもあるが、そこを工夫して可能な貢献ができれば半歩なりとも進めると思うので、工夫していただきたい。

ー今回の派遣は第一回目ということで、次の第二回目以降をどうやって具体的な貢献をしていくかを現在最終的な調整をしている。うまくいけば年内にもう一度ミッションを派遣して、そこで今後の方針を決めたうえで年度内にもう一度行っていただき、来年度で仕上げたいとは考えているが、イタリア側からどんな返事が来るかを待っているところ。

- ・コンソーシアム主催のシンポジウムについて（事務局）
- ・日経アジア賞候補者推薦依頼等について（事務局）

以上